Contact Zone 2014 書評

田所聖志著
『秩序の構造――ニューギニア山地民における人間関係の社会人類学』

東京大学出版、2014年、7,200円＋税、x＋302頁

深川宏樹

本書は、パプアニューギニア中央南部の山間部に居住する、テワーダと呼ばれる人びとの社会秩序に関する民族誌である。本書で、著者は社会秩序を「人間関係の秩序」と表現する。リーダーシップ、年齢秩序、性的対立の三つの領域を軸として、村落内外の生活を貫く「人間関係の秩序」を明らかにすることが、本書の目的である。

本書の対象である高地周縁部は、ニューギニア高地と並んで人類学のリーダーシップ論が発展した主要な地域である。大規模な儀礼的贈与交換で威信を得る、ビッグマンの名はあまりにも有名だ。本書の舞台となる高地周縁部は、M・ゴドリエがビッグマンとは異なるリーダーの類型、グレートマン・モデルを提示した東部高地に隣接する。思えば、リーダーシップ論が隆盛を極めた1960年代から80年代は、パプアニューギニア研究の最盛期であった。かの地でフィールドワークをする者は、否が応でも調査地のリーダーシップに注目せざるを得ない。

ところが、著者は村落に住みこみ始めた当初、「誰が村の指導者の立場にあるのかまったくわからなかった」（iii頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）という。戸惑いを抱えたまま調査を続けていると、さらに当惑する事実に突き当たった。村の中では、それにもかかわらず、あたかもリーダーがいるかのような語りを耳にするのだ。このように矛盾した事実を前に途方に暮れた人類学者は、これまでも少なくなかったはずだ。そこでいかに活路を開くかが、フィールドワーカーの腕の見せどころである。その活路を著者は「村の外」に見出す。

本書は、序章に続いて六つの章がならび、終章で締めくくられている。以下では本書の構成にしたがってその概略を紹介したい。

序章　秩序をめぐる規範と実践の乖離
第1章　テワーダの生活環境
第2章　「村の中」と「村の外」の対立は深いか
第3章　村の中――規範が実践されない場

FUKAGAWA Hiroki　京都大学大学院人間・環境学研究科研究員　hirokifukagawa13@gmail.com

第 4 章　村の外――規範と実践が一致する場
第 5 章　集団魚毒漁――規範が集団で実践される場
第 6 章　「村の中」と「村の外」における規範・実践・秩序
終章　人間関係の秩序とメラネシアの村落空間

序章では、著者はフィールドワークの過程で直面した三つの疑問を提示し、その疑問に答えるための記述と分析の枠組みを示している。三つの疑問は、リーダーシップ、年齢秩序、性的対立の三領域に対応する。それらすべてにおいて問題となるのは、上記の三領域に関して村で語られる規範と、調査者の観察する日常的な実践とが乖離していることだ。当然、「規範と実践が一致しないことは、人間の社会ではごくあたりまえのこと」(4) ではある。しかし、本書の問題はそれに尽きるものではない。なぜなら、村で語られる規範の内容が、ニューギニアの先行研究で盛んに論じられてきた現象と極めて類似しているからだ。そうであるならば、語られる規範は別としても、規範と実践の乖離は、従来の研究の枠組みでは説明できない。

そこで代替案として提示される視角は、人びとの生活空間を「村の中」だけでなく、「村の外」、すなわち村落から離れた森や川まで含めて広く捉えるというものだ。著者が調査を進める過程で気づいたのは、人びとが日常生活を送るはずの村落を頻繁に離れ、出作り小屋や森で過ごす期間が長いことだった。それればかりか、儀礼や諸々の集団活動もすべて「村の外」で行われ、「『村の中』にいたままでは、一生かかっても彼らのことは何もわからない」(2-3) と考えるに至ったという。

こうした視点から序章以降の各章では、上記の疑問を検証するデータとその分析が提示され、最後にそれらの疑問に対する解が与えられる。

第 1 章では、調査対象の地域と人びとの概要が示される。調査地はパプアニューギニア中央南部ガルフ州の山間部である。熱帯雨林に覆われた当地域は降雨量が多く、雨季と乾季の区別は必ずしも明確ではない。生業は農耕を主とし、ニワトリとブタを飼養し、漁撈、狩猟、採集活動を行う。主食はイモとバナナである。言語は、アンガ諸語に属すタイネ語である。なお、本書で用いられる「テワーダ」とは、タイネ語を話す人びとの自称である。

第 2 章では、「村の中」と「村の外」のつながりを、テワーダ特有の病因論を通して検討する。テワーダの病因論は、森の超自然的な存在や力と結びつく。「幽霊（人間の死霊)」や「精霊」といった超自然的な存在は「村の外」の森にいると考えられているが、それが「村の中」に侵入することで病や死がもたらされるのだ。また、病の原因が、人間の邪術や妖術に求められることがあるが、これも森と深く関係している。たとえば、邪術とは、人間が森へと赴き、そこで土や虫、植物、動物の一部を使って、「村の中」にいる人間に危害をくわえる行為である。

このように、テワーダの病因論は「人間にしろ、超自然的存在にしろ、人格をもった存在が、『村の中』と『村の外』という 2 つの世界を出入りする」(90) 動きを主たる原理とする。村はそれ自体としては病や死の原因がない「安全地帯」であり、災厄は森の精霊や

「村の外」に出た人間の邪術によってもたらされる。「村の中」と「村の外」は異なる意味を付与された別個の空間だが、両者の境界を侵犯する人格の動きが病因論の中心を成す点で、全体としてひとつの論理空間を形成している。

第3章では、本書の主題のひとつである「村の中」の生活が記述される。家屋と村落は、ともにアギ（aki）と呼ばれる。アギは人が森を開拓し、木を伐り出して家屋を建てたという意味で「人間が森を変えて生み出した空間である」(98)。村落を構成する基本的な単位は、単一の家屋に居住する小規模な人の集まりである。著者はこれを「共住集団」と呼ぶ。共住集団は夫婦とその子どもを中心として形成され、父系の論理が強調されるが、非男系成員を組み込む柔軟性をもつ。生産は共住集団を単位とするが、消費の場面では、他の共住集団の人びととの共食が毎日のように行われる。総じて、「村の中」では、個々の家屋は互いに開かれており、全体として共住集団間の共同性が強調される生活が営まれている。

村落の居住形態と親族関係が説明された後で、本書の主題である年齢秩序、性的対立、リーダーシップに焦点が絞られる。年齢秩序に関していえば、男性は身体の成長と、生業に関わる知識量や経験の深さから、成熟の度合いを計られる。この点について、「村の中」では、成熟度の高い男性を敬うべきだといった規範的な語りがなされる。しかし、そうした成熟の度合いが、日常生活の男性間の相互行為を規定する側面は極めて希薄である。

同様のことは、性的対立やリーダーシップにもあてはまる。いずれの場合も「村の中」の生活では、語られる規範と、現実の行動が乖離しているのだ。

第4章では、上記の点を受けて、語られる規範と実践が一致する「村の外」の日常生活が仔細に検討される。まず、「村の外」にある畑や出作り小屋は、実は「村の中」と類似した空間であることが指摘される。畑や出作り小屋が村落と類似するのは、ともに人が森を開拓し、家屋を建てた空間であるからだ。

村と比較した時、出作り小屋の特徴のひとつは、単一の共住集団が消費の単位となる点にある。たとえば、共住集団の人びとは、野生動物や魚の肉といった稀少な食物を、他の共住集団の人びとから隠れて、出作り小屋で食べる。また、男女の性交も畑や出作り小屋で行うという。これらの事例から、著者は畑や出作り小屋を「私的な活動」（168）が行われる「家内的（domestic）領域」（169-170）であるとする。それに対して、村落は共住集団間の共同性が突出する「公的（public）領域」（169-170）だとされる。

このように「村の中」は「公的領域」に、「村の外」の畑や出作り小屋は「家内的領域」に相当する。さらに、それとは別に、村や出作り小屋の外部に広がる空間が、森や川である。森や川における活動では、リーダーシップ、年齢秩序、性的対立の規範と実践が一致するというのが著者の主張だ。たとえば、男女の性的対立に関してみると、男性らは森や川で狩りや漁を行う。そこで彼らは肉などの価値の高い食物を自分たちだけで食べてしまい、そのことを女性には秘密にする。「村の外」では、男性らは女性を排除して「男性たちだけが女性よりも大きな力をもつための振る舞い」(207）をとるのだ。これは、「村の中」において、男性が女性にも平等に食物を分配するのとは対照的である。

第5章では、集団魚毒漁の事例が取り上げられる。集団魚毒漁とは、「村の外」で、年

に1度だけ大勢の男性が集まって行う大規模な漁である。具体的には、彼らはある植物から魚毒を抽出し、それを川に流して、麻痺して浮かんできた魚を捕獲する。集団魚毒漁には大勢の男性の共同作業が不可欠であり、その組織化の起点となるのが「魚毒呪術師」である。魚毒呪術師とは、秘儀的知識によって超自然的な存在の力を得ることができる人物だ。この超自然的な存在は女性とされ、彼女が魚毒に魚を殺す力を与える。

著者によれば、集団魚毒漁では、リーダーシップ、年齢秩序、性的対立に関して、通常は語られるだけの規範が、現実の行動と一致するという。それが最も顕著に現れるのは、年齢秩序である。魚毒をつくる作業では、男性らは年齢区分（成熟の度合い）に応じて、いくつかのグループを形成する。そこで各々の男性は「知識や経験といった年齢秩序と関連する要因に制約を受けつつ」(268)、自分がどのグループに入り、どの役割を担うかを自発的に決定する。このように「村の外」の集団魚毒漁の実践では、既存の年齢秩序と合致した、個人の「自発的な」行動が見られるのだ。これは「村の中」の日常生活では年齢秩序が顕在化せず、年齢区分が大きな意味をもたないのとは対照的である。

第6章は、テワーダの「人間関係の秩序」を構成する三領域の考察にあたる。問いは、なぜ語られる規範と実践が「村の中」では乖離するのに対して、「村の外」では一致するのかというものだ。その解は、リーダーシップ、年齢秩序、性的対立の規範が、他でもない「村の外」での活動に必要である点に求められる。では、なぜ、それらの規範は「村の外」の活動で必要とされるのかというと、森や川が、人間が超自然的な存在と対峙する場であるからだという。「人間ではない存在である外部者に対処するための措置として、人間の間には、守られるべき規範が存在する」(277)。つまり、超自然的な「外部者」の存在によって、テワーダの「人間関係の秩序」は構造化されているのだ。

終章では、パプアニューギニアの他地域との比較から、テワーダの社会秩序の特徴が浮き彫りにされる。テワーダの特徴は「『村の中』と『村の外』という空間の移動と往復を通じて、人びとの人間関係の秩序が再構造化されている」(283）点にある。ニューギニアの先行研究では村落中心の視点が支配的であったのに対して、本書は「人間関係の秩序がつくられる過程において、『村の外』での活動が大きな役割を果たしていることを明らかにした」(284）点に独自性があり、そこに本書の意義があるといえる。

以上みてきたように、本書は「テワーダの人びとが自分たちの規範やそれを支える理念として語る内容」(iv）と日常的な実践とのズレを、「村の中」と「村の外」という空間の往復運動から説明する。この問題意識と着眼点は、先行研究を視野の片隅におきながらも、あくまでフィールドワークで直面する素朴な疑問に導かれたものだ。どこまでもフィールドから議論を立ち上げようとする著者の姿勢に、同じニューギニアで調査をする者として、評者は強い共感をおぼえる。本書には、いささか相互に矛盾する論述が幾つかみられるが、それも複雑な現実を自らの枠組みに強引に還元せずに、誠実に記述する著者のスタンスを表している。容易には理解しがたい現実に辛抱強くつきあい、見通しのきかない藪の中へと分け入ろうとする著者の態度は、誰もが見習うべき模範のひとつであろう。

本書の意義は、まず、出作り小屋と畑が散在する森の中の活動を含めた日常生活に注目

した点にある。もちろん、従来のニューギニア研究において、村から離れた森での活動が全く記述されてこなかったわけではない。だが、その多くは単なる生産労働か、儀礼に偏っていた。本書が、人びとの集住する村落から、畑や出作り小屋のある森までを、広く生活領域として捉え、そこでの日常を詳細に描き切った点は評価されるべきだろう。それは確かに、1960年代〜80年代のニューギニア研究における競覇的な贈与交換やイニシエーション儀礼の記述に比べれば、多少ドラスティックさに欠けるものかもしれない。しかし、そもそもパプアニューギニアの大半の地域では、そうした儀礼は20年〜30年以上前に放棄されている。こうした状況下、本書のように先行研究が見落としてきた日常生活を包括的に記述し、その細部まで丹念に拾いあげていく、ニュアンスに富んだ民族誌が求められている。

本書のもうひとつの貢献は、集団魚毒漁と年齢秩序の相関を明らかにした点にある。これまでのニューギニア研究では、集団魚毒漁を主題化した研究は非常に稀である。その点で、本書には民族誌的な価値がある。また、この点は著者自身が強調しているが、年齢秩序に関する先行研究は、イニシエーション儀礼の研究に偏重していた。それに対して、本書が儀礼における象徴レベルの分析に終始することなく、集団魚毒漁の社会的な組織化において年齢秩序が現実に作動する場面に光を当てた意義は大きい。そこから、従来の研究においては明らかにならなかった側面、すなわち個人の自発性や様々な偶然性に左右されながら、曖昧さと揺らぎを孕んで年齢秩序の輪郭が立ち現れてくるプロセスがみえてきた。この年齢秩序は実践と一体となって、その都度、異なるすがたをもって生成する、一回性と反復性を兼ね備えた現象である。

以上のような本書の意義と価値を前提としたうえで、以下では、本書の議論に関して二点指摘しておきたい。

一点目は、本書の考察部分の主張についてである。著者は「村の中」では語られる規範と実践が一致せずに秩序に亀裂が入る一方で、「村の外」ではそれらが一致した秩序が実現すると論ずる。そのうえで、テワーダの秩序は二つの空間の往復運動によって構造化を繰り返す、というのが著者の主張（278、283-284）である。この主張は、評者にとって必ずしも明らかではなかった。むしろ、評者には「村の中」と「村の外」の世界が、部分的には連続しながらも、異なる社会性をもつように映った。

たとえば、村では喪の期間に男女が赤いパンダヌスの実（男性の成長に必要な血の代替物）を食べることは禁じられている。だが、男性らは森の中でそのタブーを易々と破る。しかも、その事実を女性たちには秘密にしなければならないという。これは森の中で男性たちによって語られる「規範」と、村で男女によって守られる「規範」が異なることを示しているのではないだろうか。2つの規範は対立するが、「村の外」で、「『村の中』では語られるだけであった女性が劣位におかれるという性的対立の秩序が現れる」（207）としても、それを男性らが秘密にすることによって、「村の中」の秩序が揺らぐことはない。社会全体を統制する規範を想定して、規範と実践の一致と不一致を検討するだけでなく、異なる空間に異質な社会性を認め、それら相互の関係性を問う方向性があってもよいであろう。

これと関連して二点目は、著者が「村の外」で実現すると論じた性的対立についてである。まず、「村の外」の畑や出作り小屋では、夫婦とその子どもを核とする共住集団が、他の共住集団の人びとから隠れて、自分たちだけで稀少な食物を食べる。その意味で、畑や出作り小屋は「私的な」空間である。この点に異論はない。しかし、著者が森や川に関しても、畑や出作り小屋と同じように、男性たちが女性に秘密で貴重な食物を共食する「私的な」空間であると論じるとき（167-168）、評者は違和感を覚えた。森や川は、男性たちが示し合わせて集まり、赤いパンダヌスを食べ、獲った魚を共食する場である（206-207）。したがって、森や川は「私的な」空間というよりは、むしろ男性的な領域を創出しうる場として捉えるべきであろう。

また、別の視点からみれば、森や川は、ある種の異性関係を取り結ぶ空間としても捉えられる。著者によれば、集団魚毒漁は「日常的に離れて暮らす人びとが集まる共同活動である」（217）点で「特殊な『村の外』の場」（217）である。つまり、集団魚毒漁は「村の外」で行われるにもかかわらず、「私的」でなく「公的」活動であるために「特殊」だというのだ。しかしながら、視点を変えれば、集団魚毒漁が「村の外」の「特殊な」活動であるのは、男性たちが女性の超自然的な存在と関係を築く点にこそある（以下、評者は著者のいう「女性の超自然的な存在」を便宜上「女性の精霊」と表記する）。

順を追って説明すると、まず著者は魚毒をつくる作業から、人間の女性が排除されることをもって、性的対立の実現とみなしている。だがそこでは、人間の女性が排除されていても、実のところ女性性は排除されていない。漁で使われる乳白色の魚毒は、女性の精霊の母乳であり、魚毒に魚を殺す力を与えるのも彼女である（246, 277）。彼女は嫉妬深く、作業中、男性たちが人間の女性の個人名や親族名称を口にすると、魚毒の効力を失わせてしまう。ゆえに、そうした振る舞いは固く禁じられている（267-277）。これらの事実に光を当てたとき、集団魚毒漁において、男性らは人間の女性との異性関係を切り離すことで、はじめて、女性の精霊との異性関係を築くことができると解釈することもできるだろう。

この異性関係によって産み出されるのは、魚毒（＝母乳）を飲んだ大量の魚（＝子ども）である。これは性的対立でもなければ、男性による女性の「自然な」特性（e.g. 生殖能力）の流用（appropriation）でもない。むしろ、象徴的な論理を織り込んだ異性関係によって、モノ（＝人格）が生産される過程として積極的に捉えることができる［Strathern 1988: 182-184, 240-244, 267］。このようにみたとき、集団魚毒漁は男性の集合的な活動でありながら、畑や出作り小屋の「家内的領域」における生殖・再生産（reproduction）活動とアナロジカルな関係にあることがわかる。

さらに集団魚毒漁の異性関係は、生産の場面だけでなく、消費の場面にも現れる。男性たちは魚毒漁で獲れた魚を家に持ち帰り、その多くを人間の女性に分配してしまうのだ（257-258）。魚の生産における男性と精霊（女性）との異性関係は、その消費における男性と人間の女性との異性関係を予示している。人間の女性の視点からみれば、魚をもたらす集団魚毒漁は「男性」の活動に映るが、この「男性」は女性の精霊との異性関係を内に含みこんでいる。著者とは別の角度から分析してみると、森や川は単なる「私的な」空間ではなく、男性間の同性関係や、（精霊まで含めた）男女間の異性関係を、村や出作り小

屋とは別の形で創り出し、人間とモノを生産する場として把握できる。一連のプロセスを「性的対立」として分析することが適切か否かは、再検討の余地がある。この事例は、いかなる社会にも共通する「人間関係の秩序」ではなく、より特殊な社会性への想像力を我々に提供してくれるのではないだろうか。

言うまでもなく、以上の２点は、いささかも本書の価値を減じるものではない。良質な民族誌は、数多の再解釈を可能とする。本書も例にもれず、理論的な含蓄の深さだけでなく、その厚い記述によって後世に開かれたものとなっている。著者はあとがきで「彼らの社会や文化のさまざまな局面を包括的に丹念に描写する民族誌を書きたいと思ってきた」（287）と述べる。その狙いは本書によって十分に達成されており、本書評で触れることができたのは、そのごく一部に過ぎない。パプアニューギニア研究者はもちろんのこと、移動と社会空間、生業と年齢秩序、ジェンダーと社会理論、そしてリーダーシップ論など、多彩なテーマに関心をもつ方々に本書を是非、読んで頂きたい。

＜参照文献＞

Strathern, Marilyn　1988　*The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia.* Berkeley: University of California Press.